宮田 篤

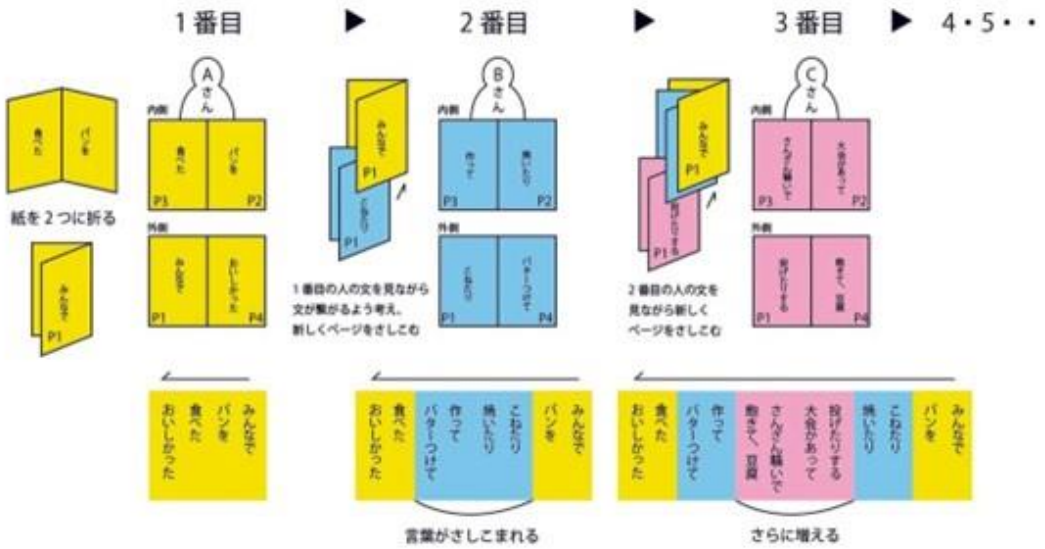
「出会い」と「ずれ」から広がる世界

―本日のゲストは宮田篤さんです。早速ですが自己紹介をお願いします。

宮田：絵画や彫刻とは異なる、「仕組み」や「仕掛け」としての作品をつくっています。皆さんが参加いただくことで何かができあがり、それをまた別の方々が見ることになるような活動を、展覧会やワークショップで行っています。

今回は《微分帖》という作品で参加しています。これは、お話を複数人で作っていける仕組み自体が作品です。2 つ折りで 4 ページにした紙を基本要素にして、１番目の人が書いたお話ができると、2 番目の人がその中央に新たな４ページを挟んで話をつなげます。そうして前の人が書いたものを受け取り、つなげることで予想外の展開のお話が生まれます（図）。ですから、そこに居合わせた人とお話を作ったり、そうしてできあがった本が読めたりするという「作品」もしくは「場所」をつくっていることになります。

図：



―《微分帖》は 2008 年から始まったそうで、きっかけはあったのですか。

宮田：愛知県立芸術大学では油画専攻で、ずっとペインティングを描いていたので

すね。僕にとって絵とは、白いキャンバスにいきなり筆を走らせるわけにもいかないもので、作品の種みたいなものが必要でした。それで、絵をつくるための自分なりの仕組みや仕掛けを探っていたとき「あれ？ この仕組みや仕掛けがそのまま作品になるのでは」と思ったのです。そこから、身の回りのものの成り立ちや構造などを作品に転用できないかと考え始めました。

《微分帖》は、複数の紙をホチキスで中綴じにした本と同じ構造をとっています。あるとき雑誌を分解して、バラバラになったページたちを見たとき、パッとひらめきした。それまでも複数人で何かをつくる仕組みは、ワークショップなどで取り入れていました。そこにこのページの成り立ちを活かすことで、参加者がアイデアを持ち寄る土台になると気づいたのです。実際にやってみたら、面白いし、構造はシンプルなので、当時のアイデアのままで続けています。一方、そこでの自分の立ち位置や考え方には変化もあり、多様な解釈ができるなと思っています。もう 15 年ほどいろいろな場で続けてきて、できあがった《微分帖》は 1000 冊以上、携帯電話や SNS 上でつくったものも合わせると 2000 冊以上あると思います。

人々が出会い・何かを生み出す「場」をつくる

―第 1 号の《微分帖》のことは覚えていますか？

宮田：はい。家に遊びに来た友だちを誘ってつくったのが最初です。スーパーで何かを買いに行った、みたいな話をつくって、これが自分としてはめっちゃ面白かったのです。翌月に絵画作品による個展を開いたのですが、僕自身も 2 週間会場に通い、絵を見にきた人たちに「最近こういうことをやっているので、一緒につくってみませんか」と声をかけ続けました。ギャラリーの隣が本屋で、たまたま個展タイトルも「としょ感」にしていので、そこまで変じゃないかなと思って。

するとみなさんが、少し驚きつつも楽しんで参加してくれたのですね。《微分帖》をつくると、ふだんの会話で生まれるコミュニケーションとはまた少し違うせいか、知らない人とも何かが通じ合う感じがあります。募集に応じて集まってもらうワークショップとも違い、たまたま居合わせた人同士の出会いが、ひとつの本、お話になるのも面白い。今も絵を描かないわけではありませんが、以来、活動の軸がこう

したものにゆっくり移行していきました。日常がそうであるように、ゆっくりと変わっていき、後で気づくことがあると思うのですが、自分にとってはそういう変化でした。

画家はアトリエでキャンバス上に絵の具を使って描きますが、今回の展覧会でいえば、東京都渋谷公園通りギャラリーの展示室につくった「びぶんブックセンター」が僕にとってのアトリエです。この場所でキャンバスではなく来場者に向き合い、テーブルを囲んでワークをしてもらったり、誰かがワークシートにちょっとしたことを書いてくれたりするのも、僕にとっての「制作」だと考えています。同時に大切にしているのは、お客さんが無理に参加していただく必要はないですよ、ということです。

―できあがった《微分帖》は、まるで短編小説のようなものもありますね。

宮田：ありがとうございます。正面切って文学でござるとは言いきれないのですが（笑）、キャッチコピーみたいなものとして「おとなもこどももあそべるぶんがく」というのがあります。

―一方で、違う人のことばが挟まっていくことで「こんな展開にしちゃったの??」みたいな予想外の変化も多く起きていそうです。

宮田：そうですね。関連して、手書きでつくることも多いので、それぞれの字の色や筆跡、大きさ、リズムなども関わっていると思います。これは実物を手に取っていただくとよくわかります。また、「クオリア」という言葉があって、例えば「赤」「黄色」「ライオン」など何でもよいのですが、ひとつの言葉にまつわるイメージの世界も、じつは人それぞれで違う。赤といえば信号を思い浮かべる人も、血の色を連想する人もいて、これは人生経験からの違いなどもあるのでしょう。でも《微分帖》では、相手の言葉に自分の言葉を付け足すのではなく、間に「挟み込む」。つまり、一度相手を受け入れたうえで、相手の言葉につなげていく。すると、言葉はつながっていくと同時にずれてもいきます。それが笑いや、ふだんのおしゃべりでは気づかないようなコミュニケーションを生むのかなと思っています。

シンプルな「仕組み」から広がる可能性

―《微分帖》には、漫画や詩を使った試みもありますね。

宮田：《微分帖》はシンプルな仕組みなので、解釈次第でいろいろな広げ方ができそうだなとは、早い段階で感じていました。本職の漫画家さんに描いてもらったのは2010年の広島市現代美術館でのプロジェクトが最初で、今回も参加してくれている、もぐこん先生とつくったものを作品として展示しました。

今回は初の試みとして、来場者が漫画家の先生方（もぐこん、ひうち棚、こいけぐらんじ）との「びぶんまんが」に挑戦できます。チャレンジしてくださる方が結構多くて、しかも上手なので驚いています。ふだん僕が会場にいるときは参加者の方々に記念のステッカーやポストカードを差し上げているのですが、不在のあいだにできあがったものを見たら「これはすごいレベルだ、特製キャップかＴシャツを差し上げた可能性があるぞ」というものもありました（笑）。

―今後も新しい展開を考えていますか？

宮田：「微分詩」はまだ作例が少ないのでもっとやってみたいです。また今回、同じ展示室の奥で関口忠司さんが書の作品を出しておられますね。もちろん書そのものをじっくり見て、なぜこう書いたのか、どう書かれたのかに思いを馳せるのも正統な鑑賞のあり方だと思うのですが、「この書を《微分帖》の間に挟んでみたらどうなるかな」と想像するようなことも、今回ここでしかできない鑑賞の仕方になるかもしれないと思いました。

また、びぶんブックセンターで来場者に対応してくださるスタッフさんのなかには、手話ガイドができる方もいます。そうしたこともあって先日、手話としての《微分帖》があり得るならどんなものかと皆で話したとき、ある方が、ページが移り変わるタイミングを手話で示す動作として、足のステップを使っていたのですね。ページが進むとサイドステップを１個入れる、みたいな。こういうやり方もあるのだな、と感動しました。

さらに今回、日中英の３か国語表記で《微分帖》を作ってくれた方もいて、さまざ

まな作例が増えていくのも楽しいです。ギャラリーのご協力で英語版説明文もつくれましたし、中国語版もできました。以前に韓国語でつくったこともあり、そうした広がりも嬉しいですね。つくる場所の特性からひらめいたことはやってみたいし、《微分帖》とはこういうものだと決めつけず、柔軟に広げて研究していきたいです。

―宮田さんにとって《微分帖》はもう「研究」なのですね。

宮田：そうですね、特に今回は会場を「びぶんブックセンター」としたので（笑）。その前の展示では本屋さんの体（てい）で会場を「びぶんブックス」と名付け、「新刊を皆さんで作りませんか」という呼びかけ方をしました。今回は、会場の向かいにある渋谷パルコに以前「ブックセンター」があったのを思い出し、あれはひとつの文化センター的存在だったのではと考え、この言葉を借りて名乗ってみました。今後さまざまな地域で「ブックセンター」を開くのも楽しいかと思っています。

他者との違いを、楽しみながら考える

―《微分帖》のほかにもいろいろな仕組みや仕掛けに取り組んでいるのですか？

宮田：例えば《ちくちく地区》（宮田篤＋笹萌恵、2010-）は、2人以上のグループで、互いにフェルト素材で文字を切り取るところから始まります。ひらがなで「い」を切り抜くと、それぞれフェルトの色が違うだけでなく、同じ字でも人によって形が違ってきますよね。当然それらを重ね合わせようとすると、絶対にピタリとは合わない。でもそれらを毛糸などで1枚のフェルトに、いわば無理やり縫い合わせてもらいます。すると、ずれや重なりや縫い目が模様になってその言葉の旗ができるというものです。他者との違いやずれなどをどう乗り越えて1枚の旗にしたのか、というのが縫い目となって残るので、それを掲げて展示して、みんなで見るということをしています。

《間人間》（かみごたえの会、2017-）は僕ひとりではなく、あるワークショップチームで生まれたものです。3、4人で行うもので、そのなかの2人がペアになり、残りはオブザーバー役です。そのうえで、ペアになった2人の間に「間人間」という

存在がいると仮定するのですね。「間人間」は、たとえば竹野さんと宮田がペアなら、すべてにおいてこの 2 人のちょうど真ん中にいる存在です。年齢も、好きな食べ物も、出身地も真ん中。性別についてはまだちょっとこの言い方で良いのか、わからないのですけれど……。

例えば年齢は、20 歳と 40 歳なら間は 30 歳ですねとか、出身が静岡と東京なら、間は神奈川ぐらいかな？とか。それで 2 人が納得すればよいし、地図を引っ張り出して中間地点を探してもよい。好きな食べ物や好きな本は「間」がなかなか難しいのですが、10 分くらい話していると、結構見つかるものです。バーベキューとお刺身の間は焼き牡蠣とか（笑）。これらをオブザーバーも参加して話し合い、そのペアにとっての「間人間」のプロフィールシートをつくるというものです。そこでは、両側から超えられない壁を掘り進んで出会うような感覚があり、互いに納得できる瞬間には、場がパンッと弾けるような感じがあって面白いです。

―互いが納得できるところへ到達するまでの過程に、面白さがありそうですね。

宮田：おっしゃる通りですね。人と人の違いにはずっと関心があります。誰もが当たり前に知っているはずのことですが、僕とあなたはこんな風に違いますね、と実感できる場面は多くない気もします。ですから自分としては、作品を通じてそれを感じることへの関心があります。

―形として残るもの以外に、例えば音だけで何かをするようなこともありますか。というのも、宮田さんの作品はさまざまな人が参加できるのが特徴だと思うからです。言葉に関していうと、例えば聞こえない方、文字が書けない方、あるいはさまざまな事情で発言そのものが難しい方もいらっしゃるかもしれません。そうしたことを超えていける表現も生まれてくると素敵だなと感じました。

宮田：例えば「音」で言うと、《微分帖》の朗読などはやったことがあり、いろいろ試行錯誤しながら掘り進んでいけたらと思っています。また、《間人間》をやっていても感じますが、相手との間で本当に納得できる「真ん中」なんてない気もするのです。毎回「これは無理だろう」と思い、実際そういうことも起きますが（苦笑）、突然パッとお互いのトンネルが通じる感じで「あ、ここちょうど真ん中じゃん！」となる時がある。その意味では僕の作品も、自分がずっと考え続けてきたこと、も

しくは興味関心を持っていたことに、別の誰かが来てくれることで互いに掘り進められたら、もっと広げられるかなと感じます。自分の側からだけでなく、相手と両側から考えると面白いし、ワクワクしますね。

―今回、宮田さんは９月１日までの会期中にさまざまなイベントを考えてくださっています。皆さんぜひいらしてみてください。